# 童話

## 蟇蛙の自慢

水谷年惠

でんでん蟲が枇杷の木の葉にとまつて休んで居ました。枇杷の木の下へ、のそりと蟇蛙が出て來ました。でんでん蟲が上から、やさしい聲で、

「蟇さん、雨降りにしたいのね。」

と言ひました。蟇蛙が太い聲で、

「さうだよ」

と言ひました。

それは、丁度小供達がお三時を食べる時分でありました。でんでん虫は、まあるいおうちをしよつて、枇杷の木の枝から枝へまはつて歩さました

もう夕方になつて來ました。お日樣の赤い光が高い木の上の方だけ照してゐました。でんでん蟲はまはりまはつて、さつき休んだ枇杷の葉の上に來ました。そして、

「今夜雨が降ればいいなあ。」

と、ひとり言を言ひました、すると下の方から、

「さうだよ。」

と、さつきの蟇蛙が言ひました。でんでん蟲は、

「おや、蟇さん、あなたまだ其處にいらつしやるの。」

と、言ひました。

「まだつて、お前俺は體が大きいからな。」

「さうね、あなたは私なんかと違つて、とても大。

きいんですものね。猫位もあるわ。」

蟇蛙は、さう言はれると、うんと力を入れて、ふくれて見ました。

「あらあら、蟇さん、犬位になつたわ、まあ大きいわねえー。」

蟇蛙はもつと〳〵ふくれようと、うーんと力を入れて、ふくらんで見ました。

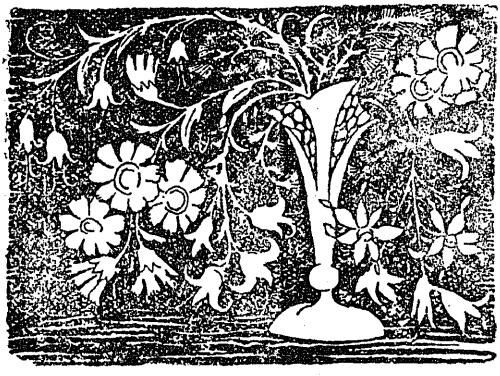
「すてきよ、蟇さん、豚位になつたわ。」

蟇蛙はもう一息と、體中の力を込めて、ううんとりきみました。

「ひやあー、牛位もあつてよ。」

と、でんでん蟲が褒め立てました。

丁度其の時、田圃から歸つて來た牛が、蟇蛙をのそりと踏み附けました。ふくらんで居た蟇蛙は

キユー

と言ひました。